まちづくりから見る観光政策について

経済学部経済システム課程

北原　開

目次　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　頁

はじめに　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　・・・３

第１章　観光まちづくりとは何か　　　　　　　　　　　　　・・・３

　１－１．観光まちづくりが注目される背景　　　　　　　　・・・３

　１－２．観光まちづくりとは　　　　　　　　　　　　　　・・・３

　１－３．観光まちづくりに必要な取り組みとは　　　　　　・・・４

第2章　滞在力のあるまちづくり　　　　　　　　　　　　　・・・５

第3章　湯布院について　　　　　　　　　　　　　　　　　・・・６

　３－１．湯布院の概要　　　　　　　　　　　　　　　　　・・・６

　３－２．湯布院の取り組み　　　　　　　　　　　　　　　・・・６

第４章　その他の観光地の取り組み　　　　　　　　　　　　・・・８

４－１．『唐津』　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 ・・・８

　４－２．『黒川』　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 ・・・９

　４－３．『長湯』　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 ・・・１０

　４－４．『屋久島』　　　　　　　　　　　　　　　　　　 ・・・１１

考察・結論　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　・・・１２

参考文献　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　・・・１３

はじめに

現在、地域の振興や経済的活性化を目的とした地方レベルでの運動、いわゆる地域づくり・まちづくりの動きが活発になってきている。そして、その地域振興の主たる戦略手段に観光事業の振興を位置づける地方自治体が全国に数多く見られる。

問題は、地域が観光事業を具体化していく場合、どのような観光資源・観光対象をベースとするかである。各地でさまざまな手法でもって観光事業が展開されているなか、外部からの開発を重視するのか、独自のまちづくりをするのかで大きく分かれる。前者の方が計画の段階から比較的簡単に進められるように思えるが、あえて時間のかかる後者の方を選択する地域があるのはなぜか。ここに、観光産業による地域活性化のポイントが隠れているのではないだろうか。

１．観光まちづくりとは何か

１－１　観光まちづくりが注目される背景

　近年、各地で住民と行政の協働作業による「まちづくり」に対する関心が高まっている。行政サービスの質を高めるには、まちづくりの主体である住民の参画が必要な場合が多く、住民の関心が高まっているのである。このまちづくりのテーマとしての取り組みの進むことが期待されているテーマが「観光」である。

　なぜ、観光をテーマとするまちづくりが期待されているのか。

　一つは、人々のふるさとへの意識を深め、生きがいを見出す場が増やしていくことができるからである。まちには、その地域ならではのよさを伝えたいと考えている人は少なからずいる。観光をテーマとした地域づくりを通じて、こうした人たちのまちのガイドとしての生きがいを深め、さらに地域への愛着も深めることになるのである。

　二つ目は、観光そのものへの経済効果が大きいことにある。多くの地域が、来訪者を増やし、その力で活性化を実現すべく、資源の掘り起こしと活用を進めている。一方で、来訪者も、新しい発見を予感させる魅力的な観光地の登場を期待している。

　三つ目は、貴重な自然、歴史的な資源、快適な住環境など、地域のよさの持続的な利用を進めることにある。今日、余暇時間の増大、豊かさ指向の高まり、交通体系の整備などを背景として、観光客の飛躍的な増大が見込まれている。こうした増大した観光需要に対して、定住環境を悪化させるなどの問題をまねかずに受け止めることのできる、魅力と持続性を兼ね備えた観光地の形成が求められている。

１－２　観光まちづくりとは

　このような背景を踏まえて、望ましい地域づくりのあり方として「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業など、地域のあらゆる資源を生かすことによって、交流を振興し、活力あふれるまちを実現するための活動」、つまり、地域の持続的な発展に向けての観光地づくりとまちづくりを一体的に行うことを「観光まちづくり」という。

１－３．観光まちづくりに必要な取り組みとは

観光まちづくりの重要な目的は、地域活性化である。地域へ来訪する観光客を満足させるだけでなく、可能な限り地域社会においても、資源を生かした定住環境の整備、地域住民の生活を向上させることが求められる。このため、観光客と地域住民との交流、地域への送客側と受入側の双方向に受け入れられるものであることが重要であり、最終的には地域社会が経済的にも、社会的にも潤うことが求められる。

観光が本質的に異文化交流をもたらす行為であり、観光客の眼差しを意識することによって、地域の公共心が育まれる契機となるのである。加えて、その地域ならではの特色を訪れる人に示し、交流を図ることによって、地域が有する自然・歴史･文化などの観光資源を再発見、あるいは再認識できるという利点をもっている。その資源－地域の特異性を活かした、また、一地域、一観光地にこだわった対応により、観光市場のなかでの優位性を持続できるようなもの―を発見することが、観光まちづくりのきっかけとなるのである。また、域外の人々との活発な交流を図ることにより、地域の知名度やイメージが向上し、地域の賑わい創出、地域住民への社会貢献を促し、住みよいまちづくりへの指針となる。

　また、観光客からの助言・批判をフィードバックしながらより魅力的な観光地を整備すると同時に、地域住民にとっても日常的な生活の質を高め、かつ誇りに思える魅力ある地域をつくるインセンティブができ、郷土愛が育成されることが期待できる。このように住民参加型による観光地まちづくりによって、地域の活性化を促すことになる。要するに、地域の振興をするには、従来の地域と触れ合いの少ない観光施設への閉じ込め型観光サービスから、地域住民との交流などの地域の素顔をより多く見せる地域ぐるみ型観光サービスへの脱皮が必要とされる。

このような展開から、先駆的な地域では美化運動や環境整備が進み、住民の手づくりによるボランティア型観光が注目を集め、一方では行政機関や観光協会が中心となって、共同で観光振興に取り組む観光推進活動が活発化、観光キャンペーンなど広域的な観光客誘致活動も一般的になっている。

観光まちづくりの展開には、観光宣伝など地域からの情報発信と、地域を訪れた観光客へのアプローチが要求される。賑わいのある観光地づくりのなかで新しい観光事業の創造を考える時代になってきたのである。

　地域における賑わいの場、賑わいの観光地づくりは、観光振興の面からみても重要な課題だが、そこには地域住民・観光客のふれあい、交流により、その賑わい効果は増進する。そのためには、地域文化や風習を保守したり、地域の固定観念やしきたりに誇示したりするだけでなく、時代に対応した感性や、観光客のニーズをどのように地域社会に融合させるかを考える必要がある。地域社会の環境づくりの発想が住んでよいまちへの方向づけとなり、観光客からは訪れてよいまちへの評価へ、さらにはマスコミに対しても、受け入れやすいパブリシティとなって、賑わいづくりの輪が拡大してくのである。地域の賑わいづくりが新しいまちづくりの、またこの努力が交流社会の観光地まちづくりであることの認識が高まってきている。

２．滞在力のあるまちづくり

　わが国政府は、「観光立国推進基本計画」（ 平成19年6月閣議決定）において、平成22年までに、訪日外国人旅行者を1,000万人日本人の国内観光旅行における年間宿泊数を4泊にすることなどを目標に掲げている。この２つの目標のなかでも年間宿泊数の増加に焦点を当てていきたいと思う。

・目標策定の背景

1. 団塊世代の退職に伴う余暇活動の拡大

団塊世代が、現在の退職世代より余暇活動を拡大すると予想し、国内宿泊数は約**0.15**泊増加すると推計。

２)有給休暇取得率の上昇が国内宿泊数に与える影響

働く現役世代の有給休暇取得率が55％まで高まることで、国内宿泊旅行が増加し、国内宿泊数は約**0.3**泊増加すると推計。

３)その他の総合的な施策による国内宿泊旅行の増加

国際競争力の高い魅力ある観光地を形成すること、観光産業の国際競争力の強化及び観光の振興に寄与する人材の育成を行うこと、観光旅行の促進のための環境の整備を行うことで、国内宿泊旅行の増加分により、目標値である**4**泊まで引き上げることを目指す。

・達成状況

世界的な金融危機による景気低迷や、新型インフルエンザの流行の影響等を受けてやや

減少傾向にあり、平成18年度には2.72泊だったところ、平成21年度で2.56泊となっている。

１)団塊世代の退職に伴う余暇活動の拡大

**60**代の宿泊旅行回数が減少。原因としては、日常生活で「老後の生活設計」、「自分の健康」等悩みや不安を感じている人の割合が増加傾向にあり、貯蓄意欲が強くなる一方で消費意欲が盛り上がりにくくなっていることが考えられる。

２)有給休暇取得率の上昇が国内宿泊数に与える影響

2009年の有給休暇取得率は47．１％と、2007年の46．７％と比べてほぼ横ばいで、想定ほど上昇しなかった。

３．湯布院について

３－１．湯布院の概要

様々な観光地の中でも近年、観光地として人気を博している大分県の「ゆふいん」を中心に話を進めていくにあたってその表記が「湯布院」と「由布院」の二通りあるが考察に入る前にその二つの違いを明確にするとともに観光地として特徴を簡単に述べる。

「ゆふいん」の表記は町名とインターチェンジは「湯布院」であるが、駅名と温泉名は「由布院」である。またしばしば「湯布院温泉」と表記されることがあるが、実際には「湯布院温泉」という温泉地は存在しない。 1955年に由布院町と湯平村が合併した際、新しい行政区域が湯布院町として誕生した。したがって湯布院というのは，本来自治体名・町名である。ところが、1959年5月4日に、湯平温泉と由布院温泉、塚原温泉が国民保養温泉地に指定された際、指定名称が湯布院町内の温泉を対象とする意味から「湯布院温泉」の名となった。このような背景から「湯布院温泉」といういわば架空の名称が生まれた。

歓楽街を廃した町並みは「東の軽井沢、西の湯布院」といわれ、女性に人気がある。同じ温泉の町でも、歓楽街が多く、夜に賑わいをみせる別府市とは対照的な印象である。他の温泉地に見受けられる、規模の大きい旅館が存在しないのもこの町の特徴である。

３－２．湯布院の取り組み

湯布院の観光地(温泉地)として注目すべきポイントは以下の２つである。

**・まちづくり100年を目指す持続発展可能な観光まちづくり**

**・住民とリピーターが交流できる新たな生活型観光地づくり**

この２つに基づいた取り組みとしては…

・ゆふいん料理研究会

旅館の料理長が中心となり、「自分の旅館だけが良くてもだめ、由布院全体がレベルアップを」との思いにより発足。料理を研究するだけでなく、地域との繋がりを持ち、さらに腕を磨くため、湯布院映画祭などの各種イベントに参加し地域とのふれあいを深めている。また、地産地消の考えを広め地元農家との繋がりを強めネットワークの力を料理に発揮している。

・ゆふいん情報発信運動

地震の風評被害を克服する策として、観光PRのため走り出した観光辻馬車も今年で32回目を迎えた。このようにマスコミのPR力を活用する「情報発信運動」を展開、さらに住民組織の実行委員会による「ゆふいん音楽祭」「牛喰い絶叫大会」「湯布院映画祭」をスタートした。これらのイベントは由布院を一躍全国レベルの知名度を持つ町へと引き上げた。



　　　　　　　　　　　　　　　　　　　毎年秋の体育の日に開催される牛喰い絶叫大会

、由布院で育った牛を食べて、思いっきり絶叫

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　する。

・歩いて楽しいまちづくり

2002年に交通社会実験を旧湯布院町で行なった。これは由布院盆地中心部に車の乗り入れ規制するとともに、歩いて楽しいまちづくりを提案した。また、この実験には延べ1,400名以上のボランティアの参加も得た。

・地場流通と異業種連携の試み

由布院温泉観光協会と旅館組合の共同事業として、親類クラブ委員会ではゆふいん流グリーンツーリズムを提唱し、多くのチームと連携して料理や物産の開発も手がけている。農業・商業・観光等の異業種が連携できる地域づくりネットワークと流通システムを目指している。

・由布院温泉旅館組合青年部

　由布院の散策の提案を始め、近隣の登山・トレッキング情報収集や発信を積極的に行う。定期的な河川清掃活動や種蒔きを行い、活動に必要とする資金を「ゆふいんかぐや姫募金」として旅館等に設置することで由布院温泉の景観保全に力を入れる。※写真は募金箱



・宿泊者数　　　由布院観光総合事務所・大分県観光動向調査

平成１４年（２００２） ９８万人

平成１５年（２００３） １０３万人

平成１６年（２００４） ９６万人

平成１７年（２００５） ９０万人

平成１８年（２００６） ９３万人

４．その他の観光地の取り組み

４－１．その他の観光地の取り組み　『唐津』

平成の大合併を期に、地域の宝を掘り起こし、大陸との歴史・文化を結びつけた独

自の体験プランや観光コースの開発によって滞在力の強化を図り、毎年約30万人

の宿泊客数（入込客数は約270万人）を確保している。

・地域力を活用した観光戦略

唐津神社の秋祭りで、16世紀の終わりに始まったと伝えられる『唐津くんち』。勇壮華麗な曳山14台が巡行する姿は圧巻。3年前より、年中行事のうち、くんちの始まりを告げる幕洗い行事や、10月の1ヶ月間行われる囃子の練習など「夜のイベント」や、日本三大朝市のひとつ呼子の朝市など「朝のイベント」を組み合わせた観光コースを積極的に紹介し、宿泊客の増加に寄与している。その効果もあって、平成19年度の唐津くんちの人出は、3日間で61万人と過去最高を記録した。また、玄界灘の海の幸や、佐賀牛など地元の食材を利用したグルメ、市内各所に点在する良質な温泉、宝くじの当選祈願として有名な宝当（ほうとう）神社など、合併により生じた豊富な地域資源を有効に活用し、交通アクセスの良い「福岡都市圏」からの誘客を強化。さらに、宿泊補助制度を充実させて、スポーツ合宿やコンベンションの誘致等も積極的に展開している。

・虹の松原の保全

約400年前、防風・防砂のため植林された約100万本の黒松を有する、国の特別名勝「虹の松原」は唐津散策の重要な構成要素であり、虹の松原の保護・育成を行うため、官民一体となった協議会を設立。市民のボランティア活動により松葉かきや清掃活動を継続実施することで、白砂青松の原風景を目指す。一方、松原の自然環境を活かした「ヘルスツーリズム」として、散策コースや癒しの体験プログラムを紹介することで滞在時間延長への取り組みを強化している。

・宿泊者数　　　　佐賀県観光客動態調査

平成１４年（２００２）　３３．２万人

平成１５年（２００３）　３１．５万人

平成１６年（２００４）　３１．３万人

平成１７年（２００５）　３０．６万人（５２．１万人）

平成１８年（２００５）　３３．９万人（５６．９万人）

(　)内数値は合併後の数値

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　４－２．その他の観光地の取り組み『黒川』

黒川温泉旅館協同組合が中心となり、観光客が好きな温泉に入湯できるシステムの構築や植樹活動等による周辺環境整備等に取り組み、黒川ブランドを発信、向上させ、毎年30万人の宿泊客数を維持している。

・入湯手形による露天風呂めぐり

黒川温泉では、旅館の一つ一つがお部屋を意味し、通りの一本一本が廊下と考える「黒川温泉一（いち）旅館」の理念のもと、24軒の旅館の露天風呂に入湯できる「入湯手形」の発行が、平成19年8月で200万枚を突破した。

・黒川温泉感謝祭

お祭りは、黒川に温泉を出してくれた「お地蔵様」への感謝と、その温泉を求めてお立ち寄り頂く多くのお客様と、いつも様々なご支援を頂いている地元の方々への感謝を込め、毎年10月第一土曜日に開催している。

　　　　　　

・旅館の一体的な取り組み

筑後川の源流地「清流の森」を流れる美しい川を守るため、環境に優しい自然派石けん等を黒川温泉全体で取り組み、容器には「Ｓ」シャンプー、「Ｂ」ボディソープ、「Ｒ」リンスの浮き彫りシールで表示するなど点字の読めない視覚障害者の方にも判別できるように配慮している。（ユニバーサル・デザイン〔ＵＤ〕の導入）また、旅館組合では、まちなみを統一する条例の設定と維持に取り組み、高さ制限や壁の色合い等の統一感を持たせ、ガードレールやカーブミラーも「土色」に施している。植樹は、旅館の建物全体を道路から見えにくくする工夫を施し、緑の中から突然旅館の建物が見せることで、おとぎ話の主

人公になったような気分で、ちょっとしたサプライズが宿泊客へのときめきを助長させている。

・滞在型温泉地への取り組み

地域還元のため入湯手形の制作を地元の「老人会」に委託し、入湯手形の収益から植樹

景観を開発（涵養植樹）することにより、統一感のある街並みの形成によって季節感を出すなどの工夫を行っている。また、地産地消の取り組みも積極的に行っており、地元で採れた野菜等を旅館の献立へ取り入れ、女将の会が中心となって、昔懐かしい献立を復活する取り組みを行っている。他にも「おもてなしの心」向上の推進、黒川温泉全体の発展のため経営者や女将向けセミナー、リーダー研修等を実施することで滞在型温泉街への質の向上を追求している。

・宿泊者数　　　　黒川温泉観光旅館組合統計

平成１４年(２００２) 　３９．７万人

平成１５年(２００３) 　３８．３万人

平成１６年(２００４) 　３３．６万人

平成１７年(２００５) 　３２．８万人

平成１８年(２００６) 　３４．０万人

４－３．その他の観光地の取り組み『長湯』

ラムネ温泉などに代表される豊富な炭酸系温泉と宿泊施設を核にして薬膳や地産地消などの食のクオリティの向上、温泉療法やヘルスツーリズムなどによる健康づくりや癒しの場としての環境整備などで、長湯温泉のブランドイメージを作りつつあり、自然景観豊かな久住高原や中世から昭和初期までの歴史・文化が残る竹田城下町と連携した多様な資源を活用した滞在型の観光を進めている。

・長湯ブランドのプロモーション展開

長湯温泉では日本有数の「炭酸系温泉エリア」や「源泉かけ流し」を特徴として他の温泉地との差別化を図りプロモーションを全国に向けて行っている。また、平成18年5月「源泉かけ流し宣言」(全国で4番目）を開催し、平成19年6月には｢全国源泉かけ流しサミット」を開催した。

全国源泉かけ流しサミットは2011年には７回目が開催され、専門の大学教授らによる温泉療養をテーマとした講演会、パネルディスカッションによる意見交換での取り組み課題の明確化などが積極的に行われた。

右写真は平成19年の様子

・外湯めぐりの環境整備

長湯温泉では元来共同浴場などの外湯を楽しむことを生活の文化としており、平成10年に公営の温泉療養文化館「御前湯」建設以来、段階的に温泉施設の充実を図り、温泉めぐりのできる環境整備を行っている。

平成17年8月「ラムネ温泉館」をリニューアル　平成19年2月長湯歴史温泉伝承館「万象の湯」開館　平成19年10月源泉かけ流し湯めぐり手形の発行

・滞在型観光の研究と推進

長期滞在型観光の実証事業などに積極的に参加し、滞在型観光地としての課題把握や研究を行っており、温泉療養と薬膳料理を結びつけた「プチ湯治の旅」などの長湯温泉ならではの商品づくりを行っている。また、平成17年に竹田市、荻町、久住町との合併後、長湯温泉を中心に市内温泉施設が連携して情報発信(温泉ガイド本）やプロモーションを実施する竹田市温泉連絡協議会を設置し、スタンプラリーなど市内温泉施設館を周遊させる取り組みを行っている。

・宿泊者数　　　　　旧直入町統計

平成１４年（２００２） １３．７万人

平成１５年（２００３） １４．４万人

平成１６年（２００４）　 １４．４万人

平成１７年（２００５） 　１４．３万人

平成１８年（２００６）　 １６．０万人

４－４．その他の観光地の取り組み『屋久島』

世界自然遺産に登録されてから、これまで以上に注目されるようになり、年々観光客が増加している。屋久島自然休養林内を森林浴を味わいながら歩いて回る登山を目的としている方は連泊されての滞在が主流。屋久島全体の景観など全てが魅力的であることから貴重な財産である自然環境を損なうことがないよう、保全・保護に努めている。

・屋久島の魅力

世界自然遺産登録の島の中で、現在、訪れる方の多い人気スポットがヤクスギランド（遊歩道のある自然休養林）と白谷雲水峡、遊歩道もあり映画「もののけ姫」の森の参考となったことは有名である。

・ガイドによるエコツアーの実施

屋久島の自然の魅力は、屋久杉、縄文杉をはじめ、山岳、森林、川、海、流水等多彩であり、エリアも広いことから、初めて屋久島に訪れた人がそのよさを十分に知ることは容易

ではない。このため、島内の各地区に島の魅力を伝えるガイドがおり、観光客に対して島固有の自然環境や歴史・文化のすばらしさや尊さを伝える活動を実施している。

・環境への配慮

基本的にゴミは各自で持ち帰るように指導しているが、山小屋などに捨てられたゴミやトイレの汚物を山から人力で搬出している。大株歩道入口トイレは循環式の環境にやさしいトイレとなっており、汚物はやはり搬出している。なお、平成19年12月には、小杉谷山荘跡地にバイオ式のトイレが設置された。

・入込者数　　　　　種子屋久観光連絡協議会調べ

平成１４年（２００２） 　２９万人

平成１５年（２００３） 　３１万人

平成１６年（２００４） 　２９万人

平成１７年（２００５） 　３２万人

平成１８年（２００６） 　３３万人

考察・結論

これまでに大分県の湯布院を始めとした５つの観光地について取り上げてきたが、どの地域にも共通して見られるのが環境整備に力を入れて取り組んでいることである。しかもその環境整備がただ快適な滞在を提供するためのものでなく、その土地本来の魅力を生かすための工夫、もしくはその土地本来の魅力を生き返らせるための工夫であるのだ。

温泉観光地であれば温泉そのものを生かしそれを中心とした周辺環境の整備をし各旅館も連携するといったように、もともとその土地にある資本を主軸に置きそれを人が盛りたてる。｢あくまで主役はその土地である｣という考え方こそがいわゆる『滞在力』であると考える。『滞在力』の考え方が「主役はその土地」である以上は「人」はあくまでその引き立て役でありここで言う「人」とは観光地域の人々のみならず、観光地に訪れる客にも当てはまる。すなわち「人」も土地全体の中の一部であり自然の中においては人の「内」「外」の区別など必要ないのである。観光地の人々は観光客に対して土地と人の境界はないのだということを感じてもらえるような取り組みをすれば、結果的にそれは居心地の良さに繋がると考えられる。

「どこか懐かしい」「初めて来たとは思えない」「アットホーム」などといった違和感の無さをより強調するような取り組みである。それは見るもの、聞くもの、匂い、味覚や触るもの、五感に訴える「何か」なのである。「何か」と表したのはそれだけ自然が大きく、また曖昧なものだと考えるからである。

実情の課題としてはやはり観光客の増加数が伸び悩んでいることが挙げられる。各地域が取り組んでいる活動は大いに継続すべきだと思うが、それと並行して外に向けたＰＲにも更に尽力しなければならないと考える。どれだけその土地の魅力あるものにしたところで、それを客となる外の地域の人々に伝えなければ意味がないのだ。前述したような曖昧な「何か」を少しでも「形」にしていくことが観光まちづくりに求められている。

参考文献：国土交通省 観光庁ホームページ